

活用事例 2

小中連携を生かした地域的な傾向の把握と児童生徒支援

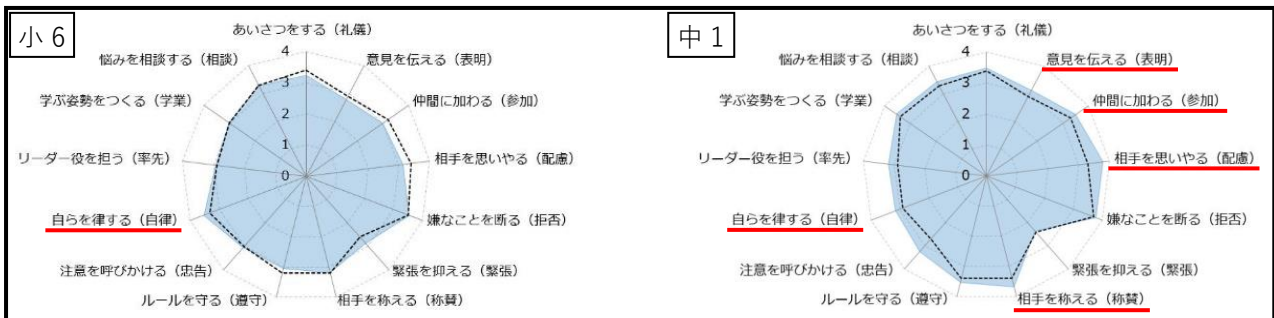
「ほっと」活用のポイント

- ☑ 地域的な傾向の把握に基づく、9年間の児童生徒支援の見通しの明確化
- ☑ 一人一人のデータに着目した支援の個別化

取組の実際

1 「ほっと」による傾向と分析

中学校区の小学校第6学年の児童と中学校第1学年の生徒を対象に6月に「ほっと」を実施した。

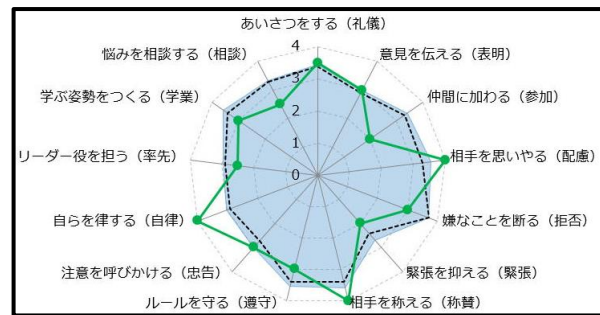


【傾向と分析】

- ・「自らを律する」の得点は小・中学校ともに高い
→地域全体に決まりを守ろうとする意識が根付いており、全体として落ち着いた雰囲気がある。
- ・中学校は「相手を思いやる」「相手を称える」「仲間に加わる」「意見を伝える」等の得点が高い
→相手意識が高まり、他を尊重しつつ自らの主張も伝えることができるなど、良好な人間関係を築く雰囲気が醸成されている。

2 分析結果に基づいた取組

中学校では全ての項目で平均値を上回っていることから、一人一人の生徒の特性に着目した。例えば、右図のように他者とのコミュニケーションが苦手な、困っていることを相談できない、嫌なことを断ることができない生徒との面談の際には、話しやすい雰囲気づくりに努め、慎重に生徒の気持ちを汲み取ることに留意した。



3 取組の成果

- 生徒がICT端末を活用して「振り返りシート」を記入したことにより、効率的に集計することができた。
- 教職員の主観による生徒理解に加え、「ほっと」の活用により、客観的に生徒個々の特性の把握に努め、それに応じてアプローチの仕方を工夫して教育相談を行うことで、生徒が悩みなどを打ち明けることができる信頼関係づくりにつながった。
- 上記2で示したグラフの生徒は、長期間に渡り悩みを抱えていたが相談できずにいた。教職員が、当該生徒の特性に基づいた相談体制を工夫することにより、当該生徒は悩みを打ち明け、学校が関係機関と連携することで解決に向けた対応を進めることができた。

「ほっと」活用のポイント

- ☑ 小中一貫教育の取組に位置付けた分析結果の活用
- ☑ 「目指す児童生徒像」や「具体的な授業改善」と関連付けて課題を明確にすること

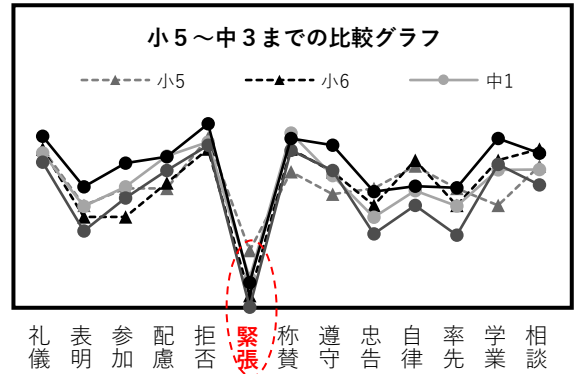
取組の実際

1 「ほっと」による傾向と分析

中学校区内3校（小学校2・中学校1）で7月に「ほっと」を実施して結果を比較した。

【傾向と分析】

- 「緊張を抑える」の得点が、どの学年においても、他の項目と比べて最も低い。
→ 「**緊張や不安によって話せなくなる**ことがある」と考えている児童生徒が多い。
→ 学校評価アンケートの結果から「目指す児童生徒像」（3校で身に付けさせたい力）のうち、「話し合いに積極的に参加できる」「自分の考えを表現できる」の肯定的回答の割合が低い。



2 分析結果に基づいた取組

3校による「学力調査の合同分析」や「公開研究会への相互参加」等を通して、「ほっと」から見える課題を「具体的な授業改善」と関連付けて共有し、以下の2点に取り組んだ。

- ① 「主体的な学び」「対話的な学び」の視点による授業改善
研究の視点を、小学校では「一人一人が主体的に学ぶ手立て／**自分の思考を表現**するための交流」、中学校では「**必然性のある課題**」などと設定して、授業改善に組織的に取り組んだ。
- ② 中1ギャップの未然防止を踏まえた対人関係の緊張・不安の軽減ための取組
小学校2校の第5・6学年を混合で学級編制し、中学校教員が授業を行う「合同授業」を実施した。**ソーシャル・スキルの向上や互いを認め合う活動等を充実**させ、緊張・不安の軽減に努めた。



3 取組の成果

- 生徒がICT端末を活用して「振り返りシート」を記入したことにより、効率的に集計することができた。
- 12月に実施した「ほっと」は、「緊張」の得点が、小学校第5・6学年、中学校でそれぞれ0.3点上昇し、児童生徒の**安心できる居場所づくり**につながったと考えられる。
- 12月の学校評価アンケートでは、「話し合いに積極的に参加できる」が3.3ポイント上昇、「自分の考えを表現できる」が4.4ポイント上昇し、生徒の学びに向かう力を醸成することができた。

